

泉穂の いまだき 恋愛講座……



日本の男の私たちは、恋を仕掛けるのがあまり上手じゃない、という話を聞かされたら、それはもしかしたら、言葉を使っているからではないかしら。

もちろん言葉は「こそ」という時には絶対決まらずにいやいやいなければならないけれど、その前段階の「きっかけ」として、もっと効果的なのは、やっぱり視線だと思う。私自身も経験があるのだけれど、これはかなり気になります。ふと何かを感じて周囲を見渡すと、射るように私を見ている眼差しに出会う、それが何か強い閃きを持っていて、言葉以上に上手に語っているのが解かった時、たしかに心の中に種が撒かれたような気になるものだ。

言葉（たとえばデートしようよ、とか）なんて全くなかったとしても、そんな眼差しで繰り返して見られたら、これはかなり「やられた」という気分になるのが女心。ただし、上手にやらないと、変態扱いされてしまう可能性もあるので要注意。最初の段階では、相手がこちらの視線に気づいたら、さりげなくさっと逸らす、できれば素敵に余韻を残して、その段階で、相手の反応をしっかりと確認すること。もしも、あんまり手応えを感じなかったら、諦めてしまった方が賢いけれど、2、3回目から相手も同じような視線を返してきて、回を追うごとに長い時間見つめ合うようになったら、これはもう大成功。最終的には、二人の間にいる全てのひとあらしめる物体を締め出してしまおうという視線になっているはず。こうなると、ほとんど前戯ですね。かなり刺激的だけれど、不思議と楽しいと言ふよりも、痛い、苦しい、という感じ。ああ、恋というのは、切なくてとっても痛いものだっただけだ、と実感してしまうのが、この視線から始まる恋かもしれせん。言葉というものはある程度繕えるもの

し、嫌な言い方をすれば、嘘をつくことも、誤魔化すこともできる。特に相手を手に入れようと躍起になった時、言葉は自分自身の本質からどんどん離れていってしまう可能性だつてあるでしょう。ところが、それだけ熱烈に見つめ合うことから始まった二人は、本能的な何かが強くて合っていると考えられるし（つまり、もう理屈抜きで好みのタイプだつたり、どうしても解かれないけれど気になつて仕方がないとか）、どちらからの視線攻撃にもう、方が応える。その時に二人の間に生じる独特の空気をちよつと冷静に見てみれば、もう波長が合っているとしか思えない。とにかくどこか動物としての行動に近いものなのだ。

えー、そんなの、動物的だなんて、なんだからいやあ、なんて思う女のことも多いかもしれないけれど、さつき書いた「痛い、苦しい」という恋心を動物は感じないと思うし、視線から始まった恋はやっぱりひどく痛い苦しなものなのだから、これはやっぱり本能的だけれど決して動物そのものの行動とは違つていふこと。

言葉なしでじつと相手を見つめる、というのはかなり抑制的な行為だけれど、一生懸命お喋りする、言葉でハートを伝えるというのは、発散的な行為でしょ。そういう意味ではたぶん、視線で始まる恋は「痛い」のではな

なくて、あまり若すぎる人たちのものではなく、どちらかと言うと、大人たちの恋のきっかけにふさわしいのかもしれない。必死で自分を表現しようとする青春時代を過ぎたあと、自分を抑えることを知った大人たちに、

実際、この視線攻撃に関しては、相手の反応、手応えを敏感に感じることができるとの良さや経験などが必要だし（それがなかったら、やっぱりただの変態と思われる可能性が高い）、ただ相手をじつと見つめるといふのはかなり度胸のいる行為なので、それなりの自信と余裕がなければとても無理。その一方で「あなたのことが好きなの」と言葉で表現できない、もう無鉄砲になれない、傷つくのが怖い、という大人たちの弱さもカバーしてくれたいという長所もあるのだけれど、

「言葉」がどんどん増えていくということ、それは「溜め息」と「眼差し」に交換されて、相手に伝えられるのだと思う。だから決して、ただ動物的なだけではないということを感じておいてください。そして、ひと通りの恋を経験して、もう自分を発散する時期が終わつたと感じるようになったら、是非、視線で恋をしかけてみませんか？その頃はきつと、自分にびつたりくる相手をほとんど出会つた瞬間に判断できるだけの目も養われていると思うから。

マンボカーパラダイス ガンリンスタンド天国

まだクルマのフロントガラスにしがみついて歩いて走っている人、京都にはいません。そういう人は、そろそろ節分ですから鬼の面にも付けかえてみては如何ですか。というわけで、手元にあるマンボな車を

MARUOKA IZUHO

【プロフィール】1965年生まれ。同志社女子大学卒。映画プロデューサーを経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「あふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスまで、待てない」(大和書房)など。

HAP HAZARD REMARKS

いうのもありました。ガソリン入れに行っているのか、景品買いに行っているのかって感じですが、でも困ったことに、そういうプレゼントがあるセール期間ってたいいどのスタンドも同じなんです。だから用もないのに無理矢理ドライブ出掛けて、ガソリン減らしたりしてスタンドのはしごしたり、もう最近では完全に趣味になってしまいました！

JAFに入っていない方は是非入会をお勧めいたします。鍵を中に閉じ込んだとか、高速道路でガス欠したとか位でもイヤな顔されることなく、黙々となおしてくれませう。JAFなんかとくに入っているよーという人も、この際お役に立つ情報をお教えしておきましょう。会員証提示で、フェリーの乗船料金とか、観光施設の入場料金が大幅に割引になる特典があるのです。知ってましたか。

着だおれに
京都る。

ササイな情報

10



イラスト：佐藤アモール陽子

ヘア写真集。ヘアが付けば(出せば)、日本ではまだまだ売り物になるでしょうか。それじゃ、どうでしょう。ヘアモード、なんて、「ジュリアナの次はこれだ!」とでも、どこかのメディアが騒げば、ラテン系のノリの良いお嬢様が、これを着て街を歩いてくれるかも・・・など、締め切りを過ぎて、書くことがなくて困っているところに、94年春夏ロンドンコレクションで衝撃的なデビューを果たしたアレキサンダー・マックイーンのコレクションの写真を持って、友人のバイヤーが遊びに来た。若千24才、老舗テーラーが並ぶサビローで修行し、ロンドンコレクショで最終日にデビューしたこの新人は、何と今シーズン、ヴェルサーチがミラノで、ガリアーノがパリで発表したマイクロミニ(超ミニスカート)をモデルにヘア丸出しで

登場させた。かつてのロンドンファッション全盛期の80年代初めから、ロンドンコレクションを見続けているその友人は、「バンクの時代から、いくつものショウを見ているけれど、堂々とヘアを出してモデルを歩かしたのはこいつが初めて」と興奮している。確かに引き裂いたジャケット、血のりの付いたようなドレス、90年代に蘇ったバンクだ」と呼びたくなる気持は良く分かる。見るものがないと、この数年、日本からもバイヤーやプレスが以前のように足を運ばなくなったロンドンコレクションだけれど、若いクリエーター達が自分達の力で、もう一度ロンドンファッションを盛り上げようという気運は、パリやミラノとはまた違った得体の知れないパワーを感じる。このアレキサンダー・マックイーンは残念ながら見ることはできなかったのだけれど、

ひととおり処分してしまい、唯一マンボなクルマではなかったものの、新車で買ったニッサンのP.A.O.までもなくなってしまうたため、ちゃんと動くクルマが一台も無くてちょっとばかり困っている最近の私です。寒い日が続く、いくら会員とはいえ毎朝J.A.F.の人に来てもらって、エンジンかけてもらうのには結構勇気がいられます。顔馴染みになって得する場合は、そうでない場合と違ってあります。この場合は、完全に後者のほうです。保険にはいって、しょっちゅう事故起こしている奴みたいなんです。J.A.F.って本当に便利ちゃんですよ。毎日呼んでも、一日に何度呼んでも年会費四千円ホッキリですからね。こんなこと書くと、J.A.F.の方からお叱りを受けるかも知れませんが、この際マンボなクルマをお持ちで、まだ

今回のロンドンコレクションで「ニュージエネレーション・デザイナー賞」に選ばれたエイブ・ハミルトンは、今年の春に彼のアトリエで会うことが出来た。彼の印象もまた、強烈だった。ロンドンの外れのホクストン・スクエアという住所を訪ねると、そこは今にも崩れ落ちんばかりのフラット。約束の時に少し早く着いたが、ドアのベルを押しても返事が無い。仕方がないので、ビルの上まで目向ぼっこをしていると、約東の12時ジャストにそのドアが内側から開いた。招き入れられた部屋はアトリエ兼彼の住居。彼の作品に埋もれるように、今し方まで寝ていたらしきベッドが見える。コレクションを一点づつ丁寧に説明してくれるのだが、その解説が面白い。昔をイメージしたニットドレスは、イタリア製の高級なモールの糸を細かく編んでいて、確かに昔に見える。エンジェルというドレス

再近ガソリンスタンドも過当競争気味で、訳の分からない現金会員カードなんていうのもたまに一方、それにも何やら各施設割引とかいろいろ書いてあります。J.A.F.会員証ほどの特典はないでしょう。まあ、こんな景気の世の中ですから使えるものはフルに使ってトクしちやいませう。そういえばやたらとチラシで入ってくるガソリンスタンドのプレゼントとか、買いに行ってますか。私なんか、街道沿いで旗振り回しているスタンなんか見つけて、ほとんど誘われるがままに給油しに入ってます。ホックステイッシュュー5箱、トイレレットペーパーなんていうのは、お金出して買ったことがあります。お醤油、砂糖もそうです。昨年は、傘のプレゼントや、カルピス、Jリーググッズ、全国各地のラーメンなんて

はアップリケに針金でモビールのようなものが胸にあしらってあり、各作品にストーリーが付いている。日本だと、とても商品として見てもえないような作品だが、これをロンドンの百貨店ハーベイ・ニコルズがバックアップし、販売もしている。デザイナーというよりは人形師のような印象の強い彼のクリエーションに対する姿勢を、ファッションのクリエーターとして真摯に受け入れるロンドンに、アンチ・ハリエガンスをベースにファッションの世界に興味を持った世代としては、やっぱり期待してしまふ。80年代初めの京都は、その得体の知れないパワーという点でロンドンと同調していた。その頃京都で騒ぎ、今東京で活躍しているアーティストも多い。そろそろ京都が暴れてのよい頃だと思っただけだ。

NODA TATSUYA

【プロフィール】1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで、関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーモサポート。

PARADISE YAMAMOTO

【プロフィール】元東京パラママンボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた。初代レガシイターリングワゴン、アルシオーネS.V.Xなどのデザインを手掛ける。現在CS衛星放送スペースシャワーチャンネルの毎週金曜日のB.U.M.T.V.で、パラダイス山元のマンボカーパラダイスを放送中!マンボ画伯ソリマチアキラとともに東京ラテンモードテラックスというバンドを結成。今年いよいよデビューアルバムができるゾ!